Fons Sapientiae

仙台白百合女子大学図書館報 フォンス サピィエンティエ

Information
de la Bibliothéque
de l'Université SENDAI SHIRAYURI

No.2
2007.3.20

大学と図書館

アメリカの大学図書館の思い出

学部長　牛渡 淳

今から12年前に、私は、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校に客員研究員として1年間滞在していた。そこで、研究者としての目から、また、大学教師としての目から、図書館の在り方について観察し体験する機会を得た。それは、長年日本の大学に勤めていた私にとって、非常に大きな驚きと発見の毎日でもあった。

まず驚いたのは、朝から夜中まで必死に勉強している学生達の姿である。図書館は常に一杯で、学生たちはわき目もふらずに本や論文を読んでいる。そして、それを支えるのが、夜12時まで開いている図書館であった。また、それを促しているのが、毎日の授業の進め方であった。授業は「図書館の利用」を前提に行われており、授業に出る前に、学生たちは、必ず、事前に指定された本や論文を読んでくることを要求される。それによって、授業の質が非常に充実し中身の濃いものになる。そして、指定された本や論文は、図書館に置いてあるため、図書館は、必然的に、学生の学習活動には無くてはならない場所となっているのである。他方、教員の部屋に専門書が少ないことにも驚いた。聞いてみると、図書館の蔵書が充実しており、必要であればそちらを利用しているとのこと。大学は、教育と研究を最も重要な機能としているが、その両方を支えていたのが大学図書館であった。図書館なしにはアメリカの大学は存在しえないということである。

当時、私自身も、毎日、自分の研究室ではなく図書館に出かけた。そこは、私にとって宝の山であり、時間の過ぎるのも忘れて調査を行った。特に、私の研究領域であったアメリカの教育政策研究のために必須の文献が所蔵されていた。連邦議会上下両院の膨大な教育関係議事録や、連邦教育局に関する貴重な資料を黙々とコピーし続けたことが思い出される。もうひとつの私の研究上の関心であった絵本作家・挿絵画家の調査に関しても、図書館は威力を発揮した。特に、貴重図書専用の図書館で、アメリカの著名な挿絵画家マックスフィールド・パリッシュの古い絵本を見つけた際、それをテーブルに広げて、あまりの美しさにうっとりと眺めていたら、向かい側に座って勉強していた男子学生も、その美しさに驚き、ぼうぜんとして眺めていたことなども、愉快な思い出である。

このように、私の1年間にわたるアメリカの研究・調査の生活は、図書館なしには不可能であった。と同時に、大学における図書館の在り方についての私の考え方に大きな転換をもたらした経験でもあった。現在も、ほぼ毎年調査研究のため、バークレー校を訪れるが、その際には、必ず教育大学院の図書館を訪れる。そこは、フリーパスで入ることができ、誰にでも開放している。そして、12年前に自分が毎日通って座っていた席に座り、当時をなつかしく思い出すと同時に、今でも、私にアメリカの教育学研究についての最新の情報を提供してくれる場ともなっている。

Contents

1 大学と図書館
2 推薦図書
3 利用者の声
4 図書館からの情報
6 新着図書の紹介
7 図書館雑感①
8 図書館からのお知らせ
8 4月の開館予定
8 編集後記

S ERENDIPITY ～こんな本に出会いました

推薦図書

＊セレンディピティ：思わぬ掘り出し物を見つける才能。偶然貴重な発見をすること。

もの食う人びと／辺見庸 著　　共同通信社

健康栄養学科
高橋伸子

どのような土地であろうとも、そこに生を授かった者は、殆どの人々がその地に生きて、ものを食う。

2007年　早春　日本のあきれるばかりの飽食はまだ続いています。1994年刊行のこのノンフィクションでは著者があとがきでこう述べています。「……やたらな飽食からそれなりの自重へと、どこかうら寂しく色合いを変えつつあるようだ。……」と。本当に日本の国に自重など芽生えているのでしょうか。国民の意識のなかにそれを期待できるでしょうか。余り変わっていないのではないかと不安になります。日本の食料自給率（カロリーベース）が40％台になって、もう17年も経っているのですから。

イラクで、ソマリアで、その他の地域でも戦争があり、飢餓に苦しむ人々が大勢いることを知ってますか。若い人たちに「もの食う人びと」を薦めます。手にとってみる、読んでみる、何かを感じとることが出来るはずです。そしてこんな読み方もしてみてください。世界地図を広げて、各目次の国がどの場所にあるかを知ることも大事なことだと考えるからです。

学生の皆さんはこの本に書かれた国々・場所をいくつ知っていますか。世界の中の日本のひとりの人間になるために、知る楽しみを学ぶことができたらと思います。

おばあちゃんのおにぎり／さだまさし 著　　くもん出版
天の瞳／灰谷健次郎 著　　角川書店

図書館職員
高橋成美

さだまさし氏の「解夏」「眉山」など本学図書館でも所蔵しており、手にとられた方々も多いと思いますが、ここで紹介する作品も著者の楽曲や小説に通底した感動を児童書である本書でも味わうことができるでしょう。第13回ひろすけ童話賞を受賞しているこの物語は、著者の7歳の誕生日に起こった出来事がモデルとなりました。温かく平穏に過ごす家族の日常の中で、孫の視点から、おばあちゃんの人生がそっと振り返られ、ある大切なことに気づいていく。

私たちは“だいすきなだれかが「いなくなる」なんてこと”を考えずに……。

心の中のおばあちゃんは、彼がちやほやされているときに限って現れ、彼女の背中はぼくを叱る。そんなトラウマを彼に与えた出来事、本書はそんな著者の後悔から生まれた温かな物語です。

また、昨年亡くなった灰谷健次郎氏の著作、天の瞳「幼年編Ⅰ」も彼の子どもに対する愛情を存分に感じ取れる作品で、天衣無縫な少年倫太郎を取り巻く大人達や仲間との交流のものがたりであり、とりわけ祖父の「ことば」は重い。

今の時代、このような人が近くにいたらとおもわずにはいられない、そんな大きな存在感をもつおじいちゃんのことばを何度も噛みしめたい作品です。

本のにおいの中で過ごす私だけの時間

利用者の声・こえ・コエ……

図書館を利用しての感想

人間発達学科（3年）　東郷裕香

2006年10月、待ちに待った新図書館が誕生しました。

新図書館を利用してみて感じたことは、とても暖かい雰囲気で居心地がよいということです。

そこには以前の図書館では感じられなかった暖かさや学習スペースがあるため、とても学習しやすい環境です。そしてレポートを書くために必要となる参考書を借りるために足を運ぶ場所としてだけではなく、ちょっとした空き時間にも足が自然と向いてしまうような場所でもあります。

また、以前の図書館を利用していた時に比べて、利用者が増えたということも感じました。それは多くの学生が、私と同じように新図書館の持つ魅力に惹かれているからなのだと感じました。

そして、図書館の中は学生にとって利用しやすいように書籍が整理されており、特に学術雑誌が見やすくなったように思います。

学術雑誌が見やすくなったことにより、ある分野に興味を抱いて終わるのではなく、実際に学術雑誌を見てどのような論文が書かれているのかにまで興味を持てるようにもなりました。

さらに、今まで３つの図書室に分室されていたため、人間発達学科に属している私は主に第２図書室を利用していました。そのために、第１・第３図書室を利用することが少なかったのです。

しかし、新図書館が誕生したことにより、今まで目にすることが少なかった第１・第３図書室の書籍も目にする機会が多くなりました。他学科の書籍を目にすることにより、知識の量も増えて行き、今まで知らなかった分野を新たに知る、ということの楽しさを感じることができました。そして自分の学ぶ学科以外の知識を得ることにより、色々な領域にも興味を抱くようになったように思います。

分室されたままではこのように感じることもなかったのだと思うと、新図書館が誕生したことは私たちにとって、とても大きな意味があると感じました。

このように、知識を広げられる場でもある図書館をこれからも活用していきたいと思います。

図書館という存在

国際教養学科（3年）　赤間佳奈

私は週の半分以上は図書館に通っています。なぜなら、自分を刺激するためです。すでに就職活動を始めている私にとって、色々な種類の新聞が置いてあり、なおかつ、ちょっとした空き時間にふらっと立ち寄れるこの場所は最高です。また、静かな空間で一人でいると集中できます。国際教養学科の生徒である私は語学系や留学系の雑誌をよく読みます。その場所には毎回必ず勉強している人がいます。そのため、「自分も一生懸命努力しよう」と思い、モチベーションが上がります。

しかし、いつも気をはっているわけではありません。例えば、天気が良い日は、いつも使っている席を離れ、日あたりのいい席を選びます。そして、そこに座わり、風を感じ、窓の外の景色をボーっと見て癒されます。また、たまに図書館職員の方と世間話をして笑っています。そんなバランスが私には、ちょうどいいのです。

昨年、図書館がリニューアルされて以来、使いやすくなり、今まで以上に長時間いてしまいます。そのため、新しい発見や掘り出し物もあり、嬉しい限りです。改めて、私にとって図書館とは、切っても、切れない、そんな関係なのです。学生生活は残りわずかとなりますが、ギリギリまでお世話になろうと思います。

図 書館のシステム・設備について

図書館からの情報

2006年10月2日に、リニューアル・オープンした新図書館のシステム・設備について、具体的な使い方を紹介します。

まず、図書館棟1階の入口には、入館ゲートが設置されています。このゲートに、学生は学生証、教職員は身分証明書、それ以外の方はライブラリー・カード、いずれも上部に赤いラインが入っていますので、その部分を下にしてゲートのスリットにスライドさせて下さい。ゲートが開いて入館できるようになります。カードを忘れた方は、入口脇のカウンターに声をおかけ下さい。

出口には、ブック・ディテクション・システムが設置されています。これは、貸出手続きを受けていない資料を持って通ると、警報が鳴りゲートがロックする仕組みです。問題がなければ、手動でゲートを押して退館することができます。くれぐれも、資料の貸出手続きをお忘れにならないで下さい。

資料の貸出手続きは、基本的に入口右側にある自動貸出装置で行って下さい。手順としては、まず、カード裏側を上にして▲inとあるほうから機械に入れて下さい。カードを入れたら、画面上の「貸出」という部分に触れて下さい。「本を1冊ずつ置いて下さい」というメッセージが出ますので、指定の場所に資料の上部を右側にして、背を奥側にする形で置いて下さい。機械が作動して貸出手続きを自動的に行います。借りたい資料が数点ある時は、「次の本を置いて下さい」というメッセージに従って、1点ずつ置いて下さい。手続きが終わったら、画面上の「終了」部分に触れて下さい。

カードが自動的に排出されるとともに、資料名と返却日を記したレシートが出てきます。これで貸出手続き終了です。ただし、卒論や実習のための貸出は期間が普通の貸出と違うので、入口脇のカウンターに申し出て手続きを受けて下さい。

各階には、検索用のパソコンが2台ずつ置いてあり、それぞれ蔵書や資料の検索ができるようになっています。フリーワード検索と条件項目検索がありますが、慣れないうちはフリーワード検索でキーワードを入れて使うと良いでしょう。また、図書館ホームページの画面上から「朝日新聞 聞蔵IIビジュアル」「河北新報記事検索サービス KD」「日経BP記事検索サービス」といったサービスや、国立情報学研究所の「学術コンテンツ・ポータル GeNii」「論文情報ナビゲータ CiNii」などのサービスも受けられます。これらのサービスは、学内なら図書館ホームページ上のアイコンをクリックすることで利用可能となります。学外から検索できるものとしては、国立情報学研究所が各大学図書館の蔵書情報を載せた総合目録データベース検索サービス「Webcat」及び「Webcat Plus」を展開しており、各大学の所蔵等の情報を見ることが出来ます。本学に所蔵のない場合は、これで検索を行い、所蔵している他大学から文献複写サービスでコピーを取り寄せることもできます。各種検索以外にも、図書館ホームページでは、本学蔵書の特徴である「中村真一郎文庫」の紹介や、図書館からのお知らせ(開閉館日等)もありますので、ご覧になって下さい。

図書館棟の各階は以下の表のようになっています。

図書館棟	主な資料・特色	資格関係資料
3F 監視カメラ有	自然科学・技術・産業・芸術・語学・文学 一般図書・家政学・栄養学・語学関係 健康栄養学科・国際教養学科学術雑誌新刊、非学術雑誌 ※視聴覚コーナー（VHS 約 1200 巻・DVD 約 700 枚・CD 約 250 枚）	フードスペシャリスト・ フードコーディネーター・ 管理栄養士・栄養教諭・日本語教員
2F 監視カメラ有	大形本 参考図書（辞書・百科辞典・専門事典・年鑑・便覧・ハンドブックなど 原則的に〈館内〉利用の資料） 就職関係図書・絵本・中村真一郎文庫・指定図書・総記・哲学・歴史・ 社会科学・心理・福祉関係・人間発達学科・総合福祉学科学術雑誌新刊	教職・保育士・幼稚園教諭・ 認定心理士・秘書・情報処理士・ 介護福祉士・社会福祉士・ 精神保健福祉士
1F 監視カメラ有	レファレンスカウンター・事務室・自動貸出装置 ABC 集密書架（発行年の古い資料・雑誌バックナンバー ） 本学所蔵紀要 約 17,000 冊 新聞 11 紙（河北・朝日・読売・毎日・日経・産経・Japan Times・ 週刊 福祉新聞・教育学術新聞・カトリック新聞・文部科学広報） 朝日デジタルアーカイブ・河北新報データベース 雑誌（時刻表・AERA・S-style・天然生活・るるぶ・ ひとり暮らしをとことん楽しむ・スッカラ・りらく・ オレンジページインテリア・サライなど） カラーコピー機（コピーカード専用）	

- 1 階と 3 階には集密書架と呼ばれる可動式の書架が置いてあり、ハンドルで操作しますが、書架に入るときは必ず間に人が入っていないかを確認し、ロックレバーを手前に引いて使用して下さい。
- 3 階奥には新書・文庫サイズの叢書を収めた「楽芽」と呼ばれるコーナーがあり、ここに置いてある資料も、検索時に配架場所が表示されるようになっています。
- 3 階には AV ブースが 8 台あり、館内で DVD やビデオが視聴できます。3 階カウンター前に AV 関係のリストが置いてありますので、それを見て資料を選びカウンターのスタッフへ申し出て下さい。
- その他、図書館に置いてほしい本のリクエストやお気づきの点・不明の点がありましたら、カウンターまたはスタッフルームにいる、図書館スタッフに何でも気軽にお声がけ下さい。皆さんの意見を反映させて充実した図書館にしていきたいと、スタッフ一同考えております。

図書館利用状況

2006 年 10 月 2 日～ 2007 年 1 月 31 日

学科	専攻	入館人数	%	貸出冊数（冊）	%	貸出人数（人）	%	AV閲覧回数（回）	%	AV閲覧人数（人）	%
人間発達学科		1,770	22.0	916	24.1	516	24.0	25	13.8	25	15.2
総合福祉学科		1,734	21.3	685	18.0	384	17.9	49	27.1	42	25.5
	生活福祉専攻	754	9.3	378	9.9	214	10.0	40	22.1	33	20.0
	人間福祉専攻	980	12.0	307	8.1	170	7.9	9	5.0	9	5.5
健康栄養学科		2,494	31.0	1,306	34.3	777	36.2	32	17.6	32	19.4
	管理栄養専攻	1,936	24.0	1,094	28.7	638	29.7	16	8.8	16	9.7
	食物学専攻	558	7.0	212	5.6	139	6.5	16	8.8	16	9.7
国際教養学科		1,293	16.0	460	12.1	285	13.3	69	38.1	63	38.2
専任教職員		643	8.0	348	9.1	145	6.8	6	3.3	3	1.8
一般（非常勤等含）		138	1.7	92	2.4	39	1.8	0	0.0	0	0.0
計		8,072		3,807		2,146		181		165	

図書館から“NEWS”を続々発信!

新着図書の紹介

「おくむらあやお ふるさとの伝承料理」

奥村彪夫 文・塚本やすし 絵
農山漁村文化協会

「いろいろごはん」「食べごとの文化」など全13巻構成。オールカラーの写真とイラストを豊富に使い、地産地消の食文化、ふるさとの味、日本のおいしさを知るビジュアルブック。伝統的なふるさとの家庭料理、食材の地域的背景、ルーツや歴史がわかる。加工・調理の工夫やそれにかかわる道具を知り、伝承料理の奥深さを学ぶ。国内地域ごとの特色、諸外国の事情や文化の異同もわかり、視野が広がる。現代の子ども向けに伝承料理を再現し、実際に調理可能となっている。

「一瞬の風になれ」全３巻

佐藤多佳子 著
講談社

とくに強豪でもない春野台高校陸上部に入部した二人のスプリンターが、速くなることを目指してひたすらに走る。そのことが次第に二人を変え、そして、部を変える。才能の残酷さ、勝負の厳しさに出会いながらも強烈に感じる、走ることの楽しさ。意味なんかない。でも走ることが、単純に、尊いのだ。最近「バッテリー」「風が強く吹いている」(所蔵有)などスポーツを題材にした小説が熱いが、これも思わず胸が熱くなるとびきりの陸上青春小説。著者の佐藤多佳子は、1989年、「サマータイム」で月刊MOE童話大賞を受賞しデビュー、産経児童出版文化賞、日本児童文学者協会賞、路傍の石文学賞を受賞。他の作品に「しゃべれどもしゃべれども」「神様がくれた指」「黄色い目の魚」(新潮現代童話館 1 所収、所蔵有)などがある。

「生きていることを楽しんで：ターシャ・テューダーの言葉 特別編」

ターシャ・テューダー 著
メディアファクトリー

ターシャ・テューダーはアメリカ東部ニューイングランドの田園風景や生活を、美しく、生き生きと描いた作風で、幅広い年齢層に愛されている、アメリカを代表する絵本作家である。彼女はまた、常に自然体で生きてきた女性であり、生活においても作品においても、商業主義や流行に流されず、19世紀の農村のシンプルな生活様式に良さを見出し、それを実践してきている。水道もスチーム暖房もない100年以上もたつ家で、絵本の仕事をしながら、４人の子どもたちを育て、現在91歳にいたる彼女の言葉は、とても自然で味わい深く、心あたたまるものがある。絵本をはじめガーデニングや言行録など、図書館でも数冊所蔵しているので、一度は手にとっていただきたい。

「夜は短し歩けよ乙女」

森見登美彦 著
角川書店

我ながらあからさまに怪しいのである。そんなにあらゆる街角に、俺が立っているはずがない。「ま、たまたま通りかかったもんだから」という台詞を喉から血が出るほど繰り返す私に、彼女は天真爛漫な笑みをもって応え続けた。「あ！先輩、奇遇ですねえ！」…「黒髪の乙女」に片想いしてしまった「先輩」。二人を待ち受けるのは、奇々怪々なる面々が起こす珍事件の数々、そして運命の大転回だった。天然キャラ女子に萌える男子の純情！キュートで奇抜な恋愛小説in京都。
作者森見登美彦は、2003年「太陽の塔」で第15回日本ファンタジーノベル大賞を受賞しデビュー。他の著書に「四畳半神話大系」「きつねのはなし」などがある。

「ピーター・パン イン スカーレット」

ジェラルディン・マコックラン 作；こだまともこ 訳
小学館

第一次世界大戦のつめあとがまだ色濃く残る1920年代―毎夜、悪夢にうなされる大人たちがいた。彼らに共通しているのは、かつてネヴァーランドでピーター・パンといっしょに冒険の旅をしたということ。ふたたび島へもどることを決意した彼らが見たのは、変わってしまったネヴァーランド。そして、ピーター・パンもまた…。ネヴァーランドを、そしてピーター・パンを変えたものとは、いったい…？百年の時をこえて、ジェイムズ・マシュー・バリからジェラルディン・マコックランへと引き継がれ、新たなピーター・パンの物語が始まる。作者のバリは慈善事業の一つとして、ロンドンにあるグレート・オーモンド・ストリート小児病院に、ピーター・パンの物語の著作権をすべて贈与し、病院の貴重な収入源となっていた。2004年、病院は、はじめて「ピーター・パンとウェンディ」の続編を許可することに決め、世界中の作家を対象として、続きを書く作家を決めるコンペティションを行った。そして、物語の概要と、1章の見本によって選ばれたのが、すでに英国でもっとも権威のある児童文学賞カーネギー賞を受賞したベテランのジェラルディン・マコックランである。この物語「ピーター・パン イン スカーレット〈緋色のピーター・パン〉」は、新しいネヴァーランドの冒険を楽しめる作品に仕上がっている。

「おんぶは こりごり」

アンソニー・ブラウン 作；藤本朝己 訳
平凡社

ピゴット夫人は、感謝の気持ちのない夫と子どもたちにうんざりして、ある日、突然家を出てしまう。残されたパパと子どもたちは、不自由な生活を強いられて困りきってしまう。国際アンデルセン賞受賞画家が描く現代の家族の肖像。ユーモアあふれる展開におもわず笑いがこみ上げてくる。作者は、背景の絵にもさまざまなしかけをこらしており、パパの影がブタになっていたり、ムンクの「叫び」を思わせる名画のパロディーがあったりして、幾層にも楽しむことができるようになっている。家事をしているときのママの顔が終始うつむきがちなのに対して、家出から帰ってきてからの表情は生き生きとしたものとなっており、感謝の気持ちの大切さに気づかされる絵本である。

図書館との出会い

健康栄養学科　猪股　恵美子

仙台白百合女子大学にも待ちに待った図書「館」が誕生した。仙台白百合短期大学の開学から数えて、41年目の出来事である。この新しい図書館が学生や教職員に大いに利用され、ますます充実したものになることを願っている。ちなみに私は、短期大学時代の図書館に3年程勤務した経験がある。今から30年も前の話になるが、場所は旧1号館4階の一角を占めており、当時は館長も含めわずか3名の館員によって運営されていた小さな図書「室」であった。そういうわけで図書館というと、わたしにとっては懐かしい場所でもある。

自分はどうやら本が好きらしい、ということに気づいたのは、この短大の図書館勤務時代だったように思う。本を整理しながら、わたしは生涯の中で一体ここにある冊数の何分の一の本を読むことができるのだろうか、と歯がゆさのようなものを感じた記憶がある。この小さな図書館にでさえこれだけの本があるのだから、ましてや世の中にはどれほど多く本があることかと思うと、何となく焦りさえ覚えたものである。

短大を離れ、東京都内を数年ごとに転居するという生活をしばらく送ったが、それぞれの場所で図書館はわたしの生活に密着していたように思う。たとえば、千代田区立の図書館。いくつかある千代田区の図書館の中でもよく利用したのが区役所に隣接しているもので、近くに官庁街、ビジネス街、あるいは北の丸公園、桜で有名な千鳥ヶ淵などがあり、平日の日中に行くと、ビジネスマン風の男性、一見ホームレスの人などが、本を読むというよりちょっと一休みという感じで席を占めていた。同じ千代田区立でも、立地条件が違えば、自然と利用者の職業なども違ってくるわけで、三番町という住宅街にあった図書館は学生風の比較的若い年齢層の利用者が多く、先の図書館に比べるといつ行っても静かで落ち着いた雰囲気のところだった。そのほかにも、調布市立図書館や、その頃通っていた町田市にある大学の図書館などが懐かしく思い出される。

さて、それらの図書館で借りた本の中で、一番思い出に残っているのが、当時まだ制作され、評判だったテレビドラマ「北の国から」のシナリオの本である。ドラマが何本も作られたぶん、当然本のほうも何冊かに分かれていたのであるが、それらの本を暇を見つけては読みふけった。おもしろかったのである。印象深い本のいくつかは、このような図書館で借りたものである。

ところで、わたしはこの3月に仙台白百合女子大学を退職する。松尾芭蕉「奥の細道」の有名な冒頭の言葉「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり」。人生もまた旅、ということであろう。その旅の途上で今度はどんな図書館どんな本に出会うか、今から楽しみである。

図書館からのお知らせ

○4月から従来の開館時間を延長し、月～金曜日は9:00～19:00、土曜日は今まで通り9:00～12:00の開館となります。

○業者の都合により、図書館棟3階のコピー機が撤去され、1階のカラーコピー機1台のみとなります。

○旧1号館の解体に伴い、図書館棟と旧1号館の接合部分にエレベーターが設置されます。
工事中騒音等でご迷惑をおかけしますが、ご了承下さい。

○返却期日に遅れた場合、遅れた図書の冊数に応じて遅れた日数分、貸出停止となります。
ただし、遅延期間が長期に渡る場合は、期間を定めて全面的に貸出を禁止することもあります。
貸出期間延長は、1度だけ1週間となります。1階カウンターに申し出て下さい。

✦ 4月の開館予定 ✦

日 SUN	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	土 SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

閉館　9:00～19:00開館　9:00～12:00開館

✦ 編集後記 ✦

図書館報第２号をお届けします。第２号の巻頭は学部長の牛渡淳先生に、そして推薦図書は高橋伸子先生と高橋成美さんに書いていただきました。二人の学生さんは、新しい図書館への期待と感想を書いてくださいました。そして今年度で本学を退職される猪股恵美子先生は「図書館雑感」ということで、図書館と本についての熱い思いを書いていただきました。
創刊号は慌てたわけではないのですが、校正ミスなどがあり、ご迷惑をおかけしました。第２号は（たぶん）大丈夫だと思います。号を重ねる中で徐々によいものにしたいと思いますので、図書館報に関するご意見ご感想をお寄せください。

（白川）

図書館報 Fons Sapientiae 創刊号の時は、図書館の引越しの最中であり、あわただしい中での発行作業でした。創刊号は幸い好評をいただきまして、いろいろな所から反響がありました。創刊号では新しい図書館への期待を、今回の第２号では新しい図書館を実際に使ってみての感想を、学生さんに執筆していただきました。主たる利用者である学生さんは、カードを使った入館や自動貸出装置を使用しての貸出にすぐ慣れ、楽しそうに使われている様子です。
新図書館についてお気づきの点・不明の点等ございましたら、図書館へご意見をお寄せください。より皆さんに身近な図書館を目指して行きたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（生出）

図書・紀要委員：大本泉、横尾元意、白川充、茂木千明、高橋伸子、猪股恵美子
図 書 館 職 員：生出登、髙橋成美、須藤清美、濱田富美江、山口普子

Fons Sapientiae 仙台白百合女子大学図書館報　No.2　2007年3月20日発行　仙台白百合女子大学 図書・紀要委員会　〒981-3107 仙台市泉区本田町6-1
tel 022-372-3254　fax 022-375-4343　http://library@sendai-shirayuri.ac.jp